# 森の木魂（こだま）

2022 年 07 月 24 日発行　第 7 号

・新代表挨拶…… 1
・第 3 回通常総会報告…… 2
・りんねの森づくり…… 6
・里親植樹・エコ散歩 …… 8
・足尾の若い風…… 10
・南相馬発…… 11
・森の仲間たち…… 12
・生物社会に生きる心得 ……14
・心のふるさと探し……15
・森は友だち・編集後記……16


## 新代表挨拶

桜井新代表（左）と中村前代表（右）

このたびの総会で代表に就任することになりました桜井勝延です。2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災当時、福島県南相馬市の市長をしておりました。マグニチュード 9.0、震度 6 弱の地震により南相馬市では大津波が海岸線を襲い、636 人の市民が犠牲になりました。引き続いて起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故によって 60,000 人以上が避難を余儀なくされ、避難をする中で 520 人の市民が災害関連死の認定を受けました。

私は、二度とこの様な災害を引き起こさないことを誓うと共に、大津波から市民の命を守るために災害瓦礫を用いた命の防潮堤作りに取り組んで参りました。森の防潮堤づくりには NPO 法人森びとプロジェクト委員会の理事長を務められた故・岸井成格さんや故・宮脇昭先生はじめ多くの方々のご支援とご指導を賜りました。改めてご支援いただいた皆様方にこの場をお借りして御礼を申し上げます。この度、森びとプロジェクトの代表を引き受けることになりましたのは、森びとプロジェクトの方々を始めご支援いただいた方々のご恩に報いるためです。

南相馬市では 2013 年から、津波から命を守るために鎮魂復興市民植樹祭を開催してきました。この植樹祭には森びとプロジェクトの方々、森びとファンクラブの方々など多くの方々にサポートしていただきました。改めて、感謝申し上げます。また、森びとプロジェクトは 10 数年以上にわたり、足尾での森づくり、八幡平の森づくり、宮城県内の森の防潮堤づくりに関わり、今でも続けておられます。

地球温暖化防止が叫ばれ、脱炭素社会実現が急がれるなか、地道な植樹活動を続けて行くことは重要な取り組みです。ロシアによるウクライナ侵攻が続く今、原発が攻撃の的にされたり、核兵器使用が現実化するような情勢の中、憲法 9 条を改悪しようとするような動きも日に日に強まろうとしています。日本は第二次世界大戦の敗戦の経験から、戦争は二度と起こしてはならないことを固く誓い日本国憲法を制定しましたことを、風化させてはなりません。南相馬市は「脱原発都市宣言」をしました。同時に、市民には日本国憲法の冊子を全世帯に配布してきました。世界平和を守り、地球温暖化を防止し、安全に暮らしていくためには原発からの撤退と戦争を起こさないことが重要になってきています。

このような時期に中村幸人代表から重要な任務を引き継ぐことは私には任が重すぎますが、「山と心に木を植える」のスローガンの下、森びとプロジェクトに集う全ての皆様の力を合わせて、根気強く大きな仕事を成し遂げて参りたいと決意しています。皆様方のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。と共に、皆様のご健勝をお祈り申し上げましてご挨拶といたします。

代表　桜井勝延

事業報告

# 第３回総会開催報告

6 月 26 日(日)、林野会館会議室(東京都内)において第 3 回総会を開催しました。会議室とオンライン会議に出席いただいた方は、正会員 365 名中 311 名（委任状含）でした。

13 時、大野運営委員の司会で総会が開会され、規約にある会員の 3 分の 1 以上の出席を確認し、総会成立が宣言されました。議長に選出されたのは加賀春吾さん、挨拶を受けた後に議事が進められました。中村幸人代表から主催者挨拶があり、以降、2021 年度活動経過報告（森作業を動画で報告）、2021 年度収支決算報告、会計監査報告を受け、3 つの報告とも承認をいただきました。続いて、2022 年度活動方針案、2022 年度予算案が提案され、質疑応答に入りました。モニターに映し出されたオンライン参加者と会場の 12 名の会員からは、各地の活動で得た教訓をもとに、2022 年事業計画案に肉付けをしてくれました。(発言要旨は 4P～5P に掲載)

運営委員会からの答弁(3P に要旨を掲載)を行った後、運営委員、会計監査の選任を行いました。今総会では、中村幸人代表、太宰初夏運営委員が退任し、新たに桜井勝延さんが新代表に、大山博延さんが運営委員に選出されました。中村幸人さんは植生アドバイザーとして森づくりに助言をしてくれることになりました。総会をつくり出してくれました会員の皆さん、委任状で参加してくれました会員の皆さん、ありがとうございました

### ●「地球温暖化にブレーキをかける国連、政府等への要望書」の骨格について

市民の植樹活動や生活の中でのアクションだけでは地球温暖化にブレーキをかけていくことは難しくなっています。私たちは、「脱炭素社会の課題を考える 3.26 シンポジウム」で出された会員からの意見・要望を受け止め、森びとの「アクションプラン」の実現に向けて、国、林野庁、連合、国連などへ私たちの声を要望書にまとめて提出いくことにします。その声は、会員の皆さんが住んでいる地域で、様々な形態のなかで広めていく計画です。その骨格は以下の通りですが、皆様の意見をお待ちしています。

①エネルギーについて考える日を毎月 1 日設け、全ての先進国のネオン、イルミネーションの消灯日を設けるよう提案をします。

②10 年間で 1 億本の木を植える国民運動を推進するために、植樹や下草刈りを行うボランティアに参加できる時限立法「エコ休暇」（仮称）を実現する働きかけをします。

③植樹後の森の育樹、管理のための雇用の場の確保を実現できるように働きかけをします。

森びとの考えるアクションプラン

### ●2022 年度　運営委員会体制について

役員体制については以下の通りです(順不同)。

顧問

高橋佳夫（無職）

アドバイザー

政治：山崎　誠（衆議院議員）
科学：倉澤治雄（科学ジャーナリスト）
植生：中村幸人（東京農業大学名誉教授）
生態：島野智之（法政大学教授）
森林：川端省三（元林野庁職員）

役員

代　　表：桜井勝延（元南相馬市市長）
副 代 表：清水　卓（会社員）
運営委員：井上　康（法人職員）
運営委員：大野昭彦（無職）
運営委員：小林　敬（会社員）
運営委員：大山博延（会社員）
運営委員：小黒伸也（会社員）

会計監査員

高橋よし子（無職）
小黒久美子（会社員）

## 事業報告

### ●第３回総会の答弁要旨

12 名の発言によって、提案した方針が補強できました。発言に感謝します。

昨日は群馬県で気温が 40 度を超えました。今日の東京は 35 度を超える暑さです。世界を見ると 6 月に入り、フランスでは最高気温が 40 度以上の地点が続出、スペインでは森林火災が発生しています。AFP 通信は「欧州で熱波到来が繰り返されるのは気候変動の直接的な影響だ」と報じています。6 月 16 日の中国広東省では、24 時間の雨量が 292.5 ㍉と観測史上最多を記録しました。報道では災害救助に向かっている消防車が流され、これに竜巻が発生して 460 万人が被害にあっています。このような気象が毎年巨大化しているのが、私たちが生きている今の地球です。

国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第 3 作業部会は産業革命からの気温上昇を「1.5 度」に抑えるには、遅くとも 2025 年までに世界の温室効果ガス排出量を減少に転じさせる必要があるとすると報告書を公表しています。果たして 1.5 度以下に抑えられるのでしょうか。

ロシア軍のウクライナ侵攻に欧米が経済制裁をした結果、ドイツ、オーストリア、オランダなどでは石炭火力発電の利用を増やす方針を決めました。日本政府も石炭火力発電の停止には後ろ向きです。加えてコロナ禍の経済が上向きになればそれに伴うエネルギーは増えるばかりです。同時に、二酸化炭素吸収源の森林火災や熱帯雨林の乱開発が止まらないようでは、1.5 度には抑えられないのではないかというのが私の気持ちです。

2025 年以降の人間社会を考えた時、想定できない気候危機の暮らしが待っていると思います。このように予測をすると、その備えをしなければ不安な生活に脅かされる日々が続くと思います。

気候危機下の生活の備えを世界中の人たちが、今からつくりださなければならないと思っています。先ほど提起させていただい活動方針を実施していくことを前提にして、私たちは 2022 年から 2025 年初頭までの期間を、その助走期間にしていければと考えています。

また、この期間には、シニア世代から次世代、（40 代から 50 代）へ森びとリーダーのタスキを渡す期間として位置づけ、人材育成を進めていきます。そのタスキは、故・宮脇昭先生と共に森づくりの現場から学んだ“生態系の中では消費者でしかない人間、生物社会の一員にすぎない私たち”という現実から気候危機下で生きる人間社会を創造していきたいと思っています。

この 3 年間の活動は、“心に木を植える”「啓発活動」と“山に木を植える”「育樹活動」を両輪にして、希望の松明を灯していきます。

具体的には、「エコ散歩」（議案書の「どんぐりゼミ」を名称替え）を実施し、森の中を歩きながらエコシステムの一員であることを体感していただきます。散歩は足尾の森と東京都内の自然公園に予定しています。また、次世代の育成については、「どんぐりゼミ」を開講し、森びとリーダーの育成を図ります。ゼミはオンライン（Zoom）を活用します。

広報活動では、動画編集に力を入れた体制を整え、リアルな森づくり活動や自然の有難さを届けたいと思います。足尾松木沢の出会いの場「遊働楽舎」（愛称：みちくさ）では人気のスポットを探し出すことのできる出会いの場を目指します。

2025 年以降の森づくり・育樹活動を展望した具体案が求められていますので、運営委員会は改めて八幡平の森、荒浜・名取市、南相馬市森の防潮堤、足尾の森の観察を実施します。その結果を来年の総会で提案させていただきます。

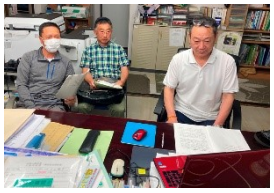
副代表　清水卓

## 事業報告

### ●第３回総会の発言要旨

総会会場からは５名が、オンラインでは５名が発言しました。東京都会員・野田佳子さんは、里親植樹の準備のお礼、神奈川県会員の城本さんは結成間もないファンクラブの抱負、栃木県会員の山田さんからは中倉山のブナ保護に携わる意気込みが述べられました。その他７名の発言は、以下の通り、編集担当が短くまとめさせていただきました。（発言順・敬称略）

茨城県の活動は地元、利根町根本寺の裏山整備です。時には、地元の方々の作業にも参加させていただき、終了後に交流が持てました。一緒に汗を流した方々との繋がりの大切さを感じています。今年度も出会いの機会を増やしたいと考えています。活動の二つ目は毎月一回のミーティング、そして今年２月には「牛久観察の森」を散策しました。森の草木に触れて、改めて心と体をリフレッシュすることができました。３月に実施された「脱炭素社会の課題を考えるシンポジウム」は、温暖化にブレーキをかけることが待ったなし！という危機感を感じました。そして、沢山の方々と危機感を共有していかなければと思いました。身近な生活の中で、省エネ・地産地消・在庫削減等から自ら実行できることをやっていかなくてはと思いました。



（茨城県・大津崇）

あと２年で応援隊結成から10年目を迎えます。私を含め応援隊メンバーは高齢化しています。このままでは今までの活動が困難になりますので、活動の軸足をどこに置くのかを話し合っていきます。育苗と育樹活動の両輪から森の草刈りや環境整備にシフトを変え、また、市民の憩いの場としての防潮堤に育てていければと考えています。第２回植樹会場にはごみの不法投棄が目立っています。６月に不法投棄のゴミを撤去しましたが、その量は軽トラック約３台分でした。森の防潮堤と私たちの生活は密接な関係にあり、生きていくためには欠かせない森であることを市民に広めていかなければと思います。鎮魂復興市民植樹祭のポリシーを風化させないためにも、心機一転頑張りたいと思います。（応援隊・岩橋孝）

３年ぶりに鎮魂復興市民植樹祭に参加しました。参加者の一人が、地元新聞に投稿し、それが記事になりました。彼は、「植樹祭の趣旨が風化されている。防潮堤の盛土には被災者の魂が宿っている。風化させないために植樹祭に関わっていく」と書いていました。そこで、秋田県ファンクラブは南相馬市の森を訪れ、10回目を迎えた森の生長と植樹祭の趣旨を心に刻みたいと思います。今年の冬は豪雪を体験しました。改めて気候変動が私たちの生存を脅かしていることを身近に感じています。私にできることは、子や孫たちが持続的な生存ができる地球環境を少しでも健全にしていくことだと思っています。微力ながら出来ることを実践していきたいと思います。今年春、私たちは秋田市議会へ「脱炭素宣言」を議決させる請願書を提出しました。市議会議員のお力沿いもあり、今月の定例議会に提出できました。結果は今月27日以降郵送されてきます。これをきっかけに、気候変動と向き合う私たちの「生活の有り様」の話合いを地域で創り出していきたいと思っています。

（秋田県・大山博延）

私たちの活動フィールドは南房総のハイキングコースです。台風や植林活動などで劣化した階段の修繕や森の育樹です。この活動の合間に、参加している地元の方々との話合いや地域の文化を伺っています。昨年10月の交流の場では、「異常気象と簡単に言うが、ヒノキを子や子孫のためと思って植えたが、巨大台風では森がこのような被害にあった。森とともに生きることは難しい。これからは自然災害が多くなってくる。世界各国の行き過ぎた経済活動の結果がこのような結果を生みだしている」といった貴重な話しを聞くことができました。このような活動を一過性だけで終わらせることなく、今後も継続していきたいと思います。（千葉県・武田芳明）

森から遠ざかっている多くの方々に「どんぐりゼミ」に参加してもらいたいと思っています。私は当初、その案内で「木は根、根は土、土は土壌動物がつくる」ことを考え、森の中でミミズやダニを観ていただく予定でした。よくよく考えてみると、この考えは限られた方々の視点であり、森から遠ざかっている方々からすればミミズやダニは敬遠されると思いました。そこで「どんぐりゼミ」という名称は「エコ散歩」に変更していただき、都内公園の森の散歩は心と身体がリフレッシュできるきっかけのひと時であるように再考したいと思います。7月31日が第一回目の散歩ですが、森の素晴らしさを発見できるひと時にしたいと思っています。
（東京都・松井富夫）

会社員の頃の私は、土日出勤、休憩なしの朝7時から夜10時までの仕事に就き、燃え尽き症に陥りました。それは重度うつに発展し、約3年間も寝込みました。退院しても「危機を脱した」だけで、何度も電池切れを繰り返すという試練の連続でした。絶望的な日々から脱出できた契機は東日本大震災でした。それからは栄養療法で散歩が毎日できるようになり、音楽療法で声を出して歌えるようになり、電車や車で遠出でき、そして森林療法で毎日フルタイムで働けるようになりました。森づくりとの出会いは2013年～14年、宮脇昭先生の森の防潮堤づくりでした。どん底から復活した私のストーリーは森から引き寄せられたものかもしれません。足尾・松木渓谷の森は、絶望からの復活ストーリーを持っています。心に深い傷を負っている人達に勇気を与える場所だと思います。切迫した時代だからこそ、森の木魂に耳を傾け、何を成すべきかをつかみ取ることではないかと思います。（栃木県・弘永裕介）

温暖化にブレーキをかけるには、温室効果ガスの排出削減と自然界の二酸化炭素吸収力を高めていくことです。想定外の異常気象と向き合っていくには、まず、危機感を持った人ができることをやらなければと思います。私たちは、昨年、「2050年までに温室効果ガス排出ゼロ」への請願書を福島県議会に提出しました。議会では全会一致で採択されましたが、その中身を精査していくことが今後の課題です。その課題は、総会で意思統一した事をシニア世代が中軸になって、活動のウイングを広げながら、実現の道を歩いていくことです。（福島県・斎藤章）

昨年は4回の育樹作業を行い、秋には観察会を実施し、数年後には豊かな森になることを語り合ってきました。今年は既に2回、補植と除草を実施しています。鮮やかな新緑を見ながら木々の生長に驚き、年々豊かになっていく森を実感しています。森づくりでは、自然に寄り添い、自然を大切にする気持ちの共有化を図るコミュニケーションも大切にしています。気候変動は食料にも影響を及ぼしています。その要因は人為的なことです。改めて、森林は豊かな土壌を育み、大気を浄化したりする役割を果たしていることをかみしめたいと思います。宮城県ファンクラブは、仙台市荒浜と名取市の「いのちの森」づくりを地道に続け、地球温暖化に少しでもブレーキをかけていきたいと思います。
（宮城県・青田隆弘）

日光市足尾の中倉山の「孤高のブナ」を目指した登山者は毎年増えているようです。私が思うに、煙害に負けずに生き残ったブナに、登山者の心を揺さぶるものがあるのではないかと思っています。同じように、松木沢にも多くの人々の心を揺さぶるスポットがあるのではないかと探しています。何故なら、気候危機と向き合う上で、自然界はそのきっかけを与えてくれるからです。次世代にはそんなスポットと時間が大切だと思い、足尾の森の中からその場を皆様に紹介したいと思っています。その候補地のひとつに、森びとが育てている森があります。それは「足尾グランドキャニオン」を望むことができる小さなスポット。水墨画風の霧の中のキャニオン、朝夕の陽に照らされるこの景色を見ていると、負の遺産から希望の遺産へと心が動くのではないかと思っています。森びとの活動スタイルと私たちの生活スタイルは転換期を迎えていると思います。案内できることを楽しみにしています。
（栃木県・橋倉喜一）

## 足尾発！りんねの森づくり

# 岩の上で土壌をつくる地衣類の働きから、極相林ができるまで

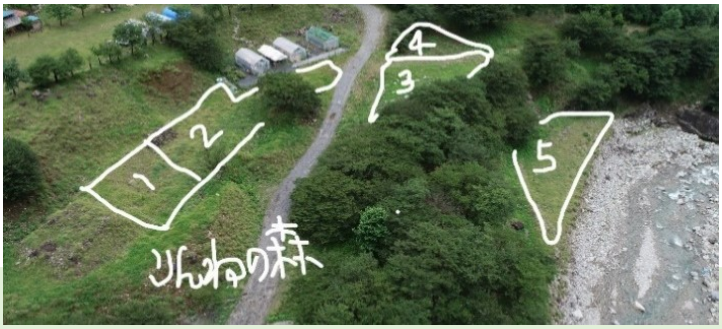
気温 35 度以上の記録的な猛暑日が続き、6 月下旬には梅雨明け宣言が出された今年。足尾・松木沢の気温も連日 30 度を超え、6 月 29 日の作業小屋の温度計は 37 度まで上昇しました。「臼沢西の森」の「里親植樹」地に運び揚げた水分が沁み込んでいた黒土は乾き、亀裂が入っていました。

この地に小さな苗木を植えれば枯れるのは目に見えています。一度植えたら動くことのできない苗木を人間の都合で枯らすわけにはいきません。当初予定していた 7 月と 8 月「りんねの森」づくりは延期することにしました。また、同時期の「里親植樹」も 9 月に実施することにしました。

「りんねの森」づくりでは、地球上のあらゆる物質と太陽光線が混じり合っている不思議な循環システムを体験したい、さらには、無機物から有機物を生産する植物(生産者)を消費する草食動物と草食動物を食べる肉食動物、この消費過程から排出される排泄物や死骸などはバクテリアや菌類が無機物に還元しているというエコサイクルの一部を感じることができないかと思っています。

このページでは 7 月に実施予定であった「りんねの森」づくりの報告ができなくなりました。そこで 5 つのチームメンバーを紹介し、森づくりに向けて一言いただきました。

運営委員　大野昭彦




りんねの森全景

### 1.砂地チーム（約 257 ㎡）

【担当】柳澤肇、橋倉喜一、清水卓

【チームコメント】

先駆種（地衣や苔）として岩や石に根を張り、互いに助け合いながら、草木が育つ環境を整える出発点に光をあてて、その生長を楽しみにしています。

清水･橋倉･柳沢

### 2.土壌改良チーム（約 339 ㎡）

【担当】加賀春吾、大塚忠孝、山内健人

【チームコメント】

草が生えていた土砂とわずかな赤土が混じった地に黒土を混ぜ合わせ、苗木たちの生長を見守ります。地中は砂利や岩が堆積し、水や空気の流れがよい場所での、ふるさとの木の生長を見守ります。

山内･大塚･加賀

### 3.赤土チーム（約 715 ㎡）

【担当】済賀正文、小黒伸也、小林敬

【チームコメント】

何十年間という時間をかけて堆積した赤土の多い地で草を刈って、穴を掘って苗木を植えます。足尾のふるさとの木々の生長が楽しみです。赤土が多く含む地でのエコシステムの一端を実感することができれば幸いです。想定外の気候変動下での、草木の適応もあるのではないかと期待しています。

小林･済賀･小黒

### 4.湿地チーム（224 ㎡）

【担当】福原辰雄、小柴隆一、大野昭彦

【チームコメント】

大雨が降ると雨が流れて溜まる地。表土は赤土ですが 20 ㌢程掘ると砂が混ざった土壌。このような土壌に生きる苗木を植えます。初めて植えるハルニレの生長と、その特性がどう生かされるかを楽しみにしています。

小柴･福原･大野

### 5.河川敷チーム（180 ㎡）

【担当】鎌田孝男、山本勉、弘永裕介

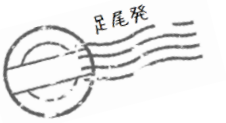
【チームコメント】

毎年の大雨で松木川が痛めつけられています。それでも雨水で流される川岸にしぶとく生きているヤナギ、オオバアサガラなどの種を中心に植えます。豪雨の勢いにもしなやかに対処する木々の不思議を体感したいものです。故・中村哲さんが護岸工事に植えたふるさとのヤナギを思い出しながら観察したいですね。

山本･鎌田･弘永

河川敷に近い場所に生えているオオバアサガラ

昨年実施した植樹地の調査風景




## 足尾発！
# ２年目に入った足尾･里親植樹

今年の「里親植樹」は５月１８日と６月１５日に実施しました。５月１４日には、東京都会員・野田佳子さんご一行が里親となり、足尾の爽やかな風をうけて植樹してくれました。

５月と６月の植樹には 128 名・３団体の応募があり、現地の私たちが足尾の急斜面の荒廃地に２４５本を植えました。

私たちは、かけがえのない地球を未来に残すために、危機に瀕している自然環境を人の手で健全にしたいと願い、日夜、草刈り、獣害対策を行っています。なお、昨年植えた苗木の生長報告は、ホームページで発信されていますので、ご覧ください。

足尾森づくりチーム　加賀春吾

**＜5 月、6 月の里親植樹参加者＞**

★５月参加者：北海道（松井春樹）、青森県（秋村光男、高杉貢）、秋田県（大山博延、船木藤典、今村博、戸松隆一）、岩手県（赤羽根博幸、高野秀幸）、福島県（渡部俊一、林雄一）新潟県（長谷川利一、大関成一、大関八千代）、群馬県（高橋佳夫、高橋よし子）、栃木県（川島博、渡辺好和、小瀬景虎、小瀬真紀、茂木由佳利、橋倉喜一、加賀春吾、加賀澄子、福原辰雄、弘永裕介、山本勉、横山薫、清水卓、清水久子、早川久子、館野富雄）、茨城県（済賀正文、仁平範義、加藤園子）、埼玉県（柳原周治郎、土田利男、中村康二、千葉直樹、森将美、山田知、佐藤正夫、岩上光延、本木実、澤井温子、澤井一、村田俊雄、稗田茂敏、田川幸枝、鈴木和子）、千葉県（石川尚吾、長谷理生、岩瀬和夫）、東京都（奈良剛吉、奈良直子、島野智之、照井欣也、鈴木昇、味原進、岸井淳子、野田佳子、佐藤舞里子、佐藤洋子、中村尚美、田中由理子、高山和子、井上優子、田村俊夫、（株）鉄道ファミリー、日本貨物鉄道労働組合）、神奈川県（木之下貴弘、松井利明、小林敬、鳴瀬一弘、小田原身知、濱田桂子、清水正夫、奈良江美子、木村元子、杉本茜・こむぎ、杉本大地・菜美・凪・大河、平田桂子）、長野県（宮永路子、三浦静吾）兵庫県（難波浩子）、沖縄県（梁次邦夫）（順不同・敬称略）

★６月参加者：岩手県（角岸禮子、高野秀幸）、宮城県(有住亀代治)、栃木県(星野平吉、川澄久夫、生沼武夫、君島豊、小室光夫、小川薫、小川順子、大野昭彦、大野礼子、矢野雅之、加賀春吾、加賀澄子、福原辰雄、関原和人)、茨城県(大津崇、塚崎将幸)、群馬県(高橋佳夫、高橋よし子、松村健、松村直子)、山梨県(守屋賢三)、埼玉県(荒井昌一、阿部吉弘)、千葉県(高梨厚、大滝俊一)、東京都(八幡直文、伊藤俊也、小椋常夫、菊池茂、岩間祐美子、奥村隆夫、田城郁)、神奈川県(小林敬、熊谷茂、武川知子、野原茂、丹澤昭治)、三重県(山口恵）（順不同・敬称略）

★本数：５月　１８５本、６月　６０本

★樹種：ミズナラ、コナラ、コハウチワカエデ、イロハモミジ、エゴノキ、シラカンバ、コブシ、ヤマボウシ、オオシマザクラ、ウワミズザクラ、ヤマザクラ、クリ、トチノキ、ハクウンボク、カツラ

**この事業は公益財団法人イオン環境財団の助成金に支えられています。**

東京発！

# エコ散歩のご案内

**都心の自然公園で「森」を感じる散歩を企画しました**

前６号の森の木魂に紹介されました「どんぐりゼミ」、改めまして「エコ散歩」として開催いたします。真夏の「都心の自然公園」（国立科学博物館附属 自然教育園）でどんなものが見つかるか、どんなことを感じられるか、「エコ散策」の下準備を進めながら、私たちも今から楽しみにしています。残念ながらこの号が出る頃には募集が終わっておりますが、もし参加できるようであれば、事務所にお問い合わせください。

ここでは、開催に先んじて散策の内容をご紹介します。散策のポイントとしては、第一に森に入ること。まずはこの森をよく見てもらうことから始めます。奇跡的にこの大都会で残った豊かな森。自分たちが知っている自然や、イメージする自然と何が違うのか、じっくり見てもらうことから始めます。そして第二は森を感じてもらうこと。視覚だけではなく五感を通し、まるごと森を感じてもらいます。そして最後に森を知ってもらうこと。小難しい話になりがちですが、できるだけわかりやすく、森の多面的な機能、生態系と多様性、森の遷移や歴史などを織り込んで、私たちが生態系の一員であることに気づく機会となればと考えています。参加してくださった方々が身近な自然について何かを考えるきっかけを得られたら嬉しいですね。

東京都 FC　坂口真理

自然公園内の様子

**エコ散歩開催概要**

| | |
|---|---|
| **イベント名** | **森びと「エコ散歩」@目黒自然教育園** |
| **開催日時** | 2022 年 7 月 31 日（日）13 時集合 |
| **集合場所** | JR 目黒駅改札 |
| **参加費** | 500 円（ボランティア保険代・紙資料代） |
| **入園料** | 大人 320 円（自己負担となります。高校生以下・65 歳以上は無料；証明証必要） |
| **締め切り** | 7 月 20 日 |
| **申し込み** | 森びとプロジェクト<br>電話：FAX　03―6417―3750　Mail：info@moribito.info |

## 足尾の若い風

# 森とともにいること

中倉山山頂から望む植樹地

6 月 11 日、中倉山に登ってきました。今回の登山は中学校以来で、日本では初めての山でした。岩や土を踏む度に、足尾銅山と渡良瀬川流域の歴史が、足を通して身体に伝わってくるような気がしました。

森びとの活動に参加するのは二度目で、最初は急斜面の荒廃地に苗木を植えたときで、二度目にあたる今回が中倉山のブナを元気にする活動です。

同行した清水さんからは、煙害対策に植えられたヤシャブシやリョウブ等の先駆樹種の役割や、標高が高いところに生えているミズナラの話を伺うことができました。2 時間半くらい歩いて「孤高のブナ」に会いました。ブナの周りには他の木が少なく、一本立ちでした。

数十年前、足尾の女性たちは荒廃地の急斜面に植生盤や植生袋を貼り付けていました。今回、私たちも、腐葉土を植生袋に詰め替え、ブナの根元に貼り付けました。「孤高のブナ」、そして中倉山の草木や生きものたちは、煙害とそれを修復しようとする営みを物語っています。山々は無言で語るだけではなく、地域の歴史と未来をつくる一員でもあります。リョウブ、ヤシャブシの木の近くにミズナラの苗が生えていることを見ると、植物遷移が地域の歴史の一部ではないだろうか、と考えさせられます。

中倉山の綾線から松木村方面を見降ろすと、森びとが育てている森が見えました。１ヶ月半前、松木沢の森を案内してくれた清水さんから、「人が 1 年間に排出する二酸化炭素量を吸収するためには何本の木が必要か」と質問されました。この質問をきっかけに、私は人間と自然環境との関係について新たな考えを得ました。「気候」や「自然」は、机やパンのように直接に触れることができるものではないけれど、森を通じての「触れ合い」が可能です。私は、荒廃地での植樹やブナ保護活動を参加して、森とつながることによって、煙害と気候変動と向き合うことができるようになると思いました。

足尾入りするたびに、私は毎回、メモした植物のカタカナ名をネットで調べています。フジ、エニシダ、シロガネスミレ、ヤマツツジ、オオバアサガラ、イロハモミジ、コナラ、ミズナラ、ヤマザクラ等々。

山の歩き方、草木の見分け方等はまだまだ分かりません。森の一員になれるには道のりは遠いですが、もっと知りたいという気持ちを抱きながら、自然環境の修復と再生を目指して、一歩ずつ踏み出していきたいと思います。

一橋大学大学院　フン・ワン・イン・キンバリー

## 南相馬発

# 人と生きものが育てる森

6/5（日)は第 10 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭が開催されました。森びとは第 1 回から運営に関わり、当日も当会の中村代表が実行副委員長として挨拶した他、39 名のサブリーダを提供し、企画・準備段階から関わっている応援隊の皆さまも含めフルサポート体制で臨みました。多くの皆さまのお力添えで無事成功裡に終わることができ、まずは心より感謝を申し上げます。植樹祭の詳細は、森びとのウェブサイトをご覧頂くか、改めて別の機会でご報告するものとして、ここでは、過去の植樹地の「現在の様子」について観察した内容と感じたことを報告します。観察は植樹祭の前日（6/4）に行いました。

最初に観察した場所は 8 年前の第 1 回目の植樹地です。木々の高さは 5 メートルを超えるものの、足尾に比較して生長は遅いようです。それだけ厳しい環境なのでしょう。植樹した樹種以外にはヌルデやテリハノイバラなど日当たりの良いところに生える木が少しありました。また、南側のハマナスがとても元気に育っていました。これは相馬農業高校の皆さんが震災で生き残ったハマナスから増やした株だそうで、やはり自生の樹種が最も環境に適しているのでしょう。これらの低木は森を風や乾燥から守る役割も果たしてくれそうです。北側の植樹をしていないマウンドは外来種を中心とした草本が生え、土が見えている状態で「何もしないとこうなる」という良い例となっています。

森に入ると、周辺に生えているオギなどが入っていて、まだ森というよりジャングルの状態でした。足尾の例を引くと 10 年を超える頃には林内が落ち着き、人が入って歩けるくらいになります。宮脇先生の言う「森の下の森」ができるのはまだまだ先なのでしょうが、これからの変化が楽しみです。

次に向かったのが第 2 回、3 回、5 回目の植樹地です。こちらは第 1 回目と比較すると規模が大きく、まさに防潮堤と言って良い大きな存在感を示していました。また、木々の生長も良く、第 1 回目の植樹地よりも大きく育つ木々も見られました。土の構成や森の規模といったところが影響しているのでしょうか。この点については深堀りの観察をするべきだと思います。自然に増えた樹種はキリ、タラノキ、ヌルデなど。またこの場所は他の団体が植樹した場所もあり、植え方や樹種によって何が違うのか、ということも観察できる場所になっていました。

この日に良く観られた野鳥はモズ。昆虫を捕食するこの鳥が多くいるということは、そのエサが豊富にあるということであり、それはきっとこの森がそれだけ豊かだということでしょう。カケスやウグイスも数多く見られ、オオタカも観察されていると聞きました。タヌキやイノシシと思われる様々なフィールドサイン（糞や土を掘り返した後など）も見られることから、この森が多くの生き物を支えていることが伺えます。

森にとって 8 年という年月は短く、まだ赤ちゃんといってもいい状態です。それでもこれだけの生き物がいるということは見事だと思いました。この森を深く知って、たくさんの人々に伝えていく。そんなことを森びとの活動のひとつにできれば面白いのではないでしょうか。

運営委員　小黒伸也

第 1 回植樹地

マウンドの上

ハマナスの花

まさに防潮堤

応援隊の要望でできた看板

## 森の仲間たち

木の根でできた花台

## 森と木と日本の文化

私の父方は代々美術商でした。戦争で大半の美術品は散逸してしまいましたが、今もいくつか手元に残っている骨董品があります。その一つが木の根でできた花台です。自然の姿をそのまま生かした、実に素晴らしい作品です。(写真)

私は縁あって 1977 年にフランスに留学しましたが、街はすべて冷たい石造りでした。3 年後に帰国して、改めて木の暖かさに目を開かれました。西洋の文化が石で自然をねじ伏せているのに対して、日本庭園は森や自然との調和を大切にしています。

日常生活を見直すと、私たちは実に優れた木製品に囲まれていることが分かります。箸や爪楊枝からちゃぶ台、障子、襖、箪笥まで生活用品は木製です。私が子どもの頃は、ご飯はお櫃に入れていました。納豆や刺身なども、すべて木を薄く削った入れ物に入れて売られていました。

歴史を遡ると縄文時代には巨木をくりぬいて丸木舟が作られました。鉄の道具がない時代に、石斧だけで作られました。こうした丸木舟が日本全国で 150 以上出土しています。

また世界最古の木造建築である法隆寺が創建されたのは 1400 年以上前の 607 年です。金堂の柱の太さは最大で直径 66 センチもあるそうです。

芸術も木が中心です。円空や木喰をはじめ、木で彫られた仏像を見ると心洗われる思いです。木霊(こだま)と言われるように、木には霊が宿っていて、仏師はその霊を彫り刻んで、仏像彫刻とするのです。日本人の森や木に対する畏敬の念は御神木にも現われています。

法隆寺が造られたころ、日本列島は巨木に覆われていました。ところが 6,7 世紀の寺院や都城の造営ラッシュで巨木は急速に姿を消してしまいました。人間による生態系の破壊は、すでに始まっていたのです。

こうして振り返ると、日本の歴史は森と木に支えられてきたことが分かります。木を植え、育てることは日本文化を育てることです。巨木に囲まれた日本列島が蘇る姿を想像しながら、ぜひ皆さんと一緒に苗木を植えていきたいと思います。

アドバイザー　倉澤治雄

## 森の仲間たち

# 山原(ヤンバル)の森と海は命どう宝だ！

梅雨空の中、辺野古と NHK 朝ドラで放送中の“ちむどんどん”の山原に行ってきた。

小雨でも辺野古は美ら海であった。そこに県民の反対の民意を圧殺し、新基地建設が強行されている。現在、ロシアのウクライナ侵攻という状況下で、日米の権力者は台湾有事を想定し、南西諸島に対空ミサイル配備を軸に共同作戦のシフトを強いている。再び沖縄が戦場化となる危機に直面し、「ノーモア沖縄戦・命どう宝」の声が高まっている。

辺野古は南西シフトの中心軸であり、沖縄県民は新基地建設阻止の闘いを 25 年以上ねばり強く継続している。その結果、浅瀬 10%未満の埋め立てに止まっている。今、海面下 90 ㍍がマヨネーズ状態の軟弱地盤と二つの活動断が新たに発覚し、建設は無理といってよい。しかも南部の遺骨の混じった土砂の埋め立てや 5,300 種の生物、262 種の絶滅危惧種の動植物の破壊がはっきりしている。山原の豊かな森に育まれた川が流れ込むおかげで、特異な地形と多くの貴重な生物が人殺しのための軍事基地に絶対してはならない。

ウリズンの山原は、里では月桃の花が、山では伊集(いじゅ)の白い花が満開であった。また、イタジイが新緑から濃い緑となり、ブロッコリーの森そのものだ。山原は世界自然遺産に認定されようにヤンバルクイナ、ノグチゲラなど多種の動植物の宝庫である。

しかし、沖縄戦や伐採で一時ハゲ山となった。そこに米軍は北部軍事訓練場として山原の森を支配していった。不使用な場所の返還がされたとはいえ、高江のヘリパットなど軍事機能は再編強化されている。米軍基地の隣が世界遺産の森という矛盾だらけという、考えなければならない山原の現実がある。

イジュの花

人類の生命・地球の危機として、二酸化炭素による地球温暖化と戦争がある。江守正多先生の講演(3/26)で 8 つのリスクが語られ、一層の危機感を増した。しかし、その具体的対策は一向に進んでいない。国家の利害や目先の経済的利益が優先している。

そして戦争である。「沖縄戦で軍隊は市民を守らない」ということが実証された。しかしその反省、教訓が生かされていない。多くの戦争犠牲者や動植物の悲鳴に真摯に向き合っていきたい。伊集の花の合言葉は「愛きょう」「ひたむきな愛」である。私は、伊集の白い花のようにひたむきな愛で人と自然にまみれていこうと思う。

沖縄県　梁次邦夫

## 生物社会に生きる心得

# エコシステムの中では消費者にすぎない

モリアオガエル　写真提供：林子さん

ヤマグワの実

足尾の森作業現場には森ともから各地の旬の味が届くことがありました。千葉県南房総からはソラマメやチチクジラの肉、秋田県からはハタハタや山菜、茨城県からはハスやカボチャ、そしてハンターからはシカ肉等をいただきました。ご馳走になる度に、私たちの命は自然界がつくりだす恵みに支えられていることを実感すると共に、仲間の心遣いに感謝し、このことが森づくりの励みにもなっていました。

地球上では熱波や干ばつによって農作物を育てることができず、食料危機に追い込まれている多くの人々がいます。食料危機という状況までにはいかないまでも、国内では台風や大雨、日照時間の影響によってジャガイモ、玉葱、フルーツが値上がり、その都度、安価な店を探している私。ここ数年では、サンマ、シャケ、イカ等の不漁が続き、庶民の魚が高級魚になり、私の食卓から遠ざかっています。

植物は大地に植えると動けません。想定外の気象でも耐え抜かなければなりません。その結果に規定されて生活しなければなりません。魚類は棲息に適した海水温度と餌が豊富な海に移動していのちを育んでいます。燃料代が高くても、魚が棲息している所で漁をしなければならない漁師。その上、グローバル市場経済、〇〇ファースト市場経済という社会に規定されて私たちは生活しなければなりません。

だからと言って、何十億人分の食料は人間の技術力だけでは賄えません。また、台風や大雨、熱波を防ぐ施設で農作物やフルーツ等を栽培することも非現実的。魚の養殖技術を高度化しても自然界の力を制御することは不可能です。

酸素や窒素、水、土壌などの物質と太陽のエネルギーが混じり合っている自然環境のなかで、有機物を作っているのが植物。この有機物に人間の知恵と技術を取り入れて私たちは生存しています。動植物の健全な生育活動なしに生きていけない消費者の私たち。

私たちの生存は生態系の複雑で不思議なシステムが健全に働いていることが前提です。このエコシステムのなかに人間社会が成り立っているという冷厳な現実を見失ってはならないと思います。その上、世界中で荒れ狂う異常気象の猛威には人間の技術だけでは太刀打ちできないということも見失ってはならないと思います。持続可能な生存を保証するには、この考えを基底に据えた平和で平等な人間社会の創造が必要ではないかと思います。世界の潮流になりつつある脱炭素社会の土台も、エコシステムの健全化という思考で築かなければならないと思っています。会員、読者のご意見をお待ちしています。

顧問　高橋佳夫

## 心のふるさと探し

# 森は生活の知恵を授ける母

階段の普請をする松村さん

足尾銅山の煙害で荒れた地での森づくりに 10 数年間携わっていることが嬉しい。

私の生活観が広がり、何事にも挑戦していかなければ成功も失敗もないことを習得してきました。

「臼沢の森」に苗木を植えて数年経った頃、私の森づくりに余裕ができ、出会いの場である「遊働楽舎」(愛称名・「みちくさ」)の前に小さな畑をつくりました。当時の思いは、松木村が廃村に追い込まれる前(廃村は 1902 年)の村びとの生計を感じとることでした。村びとは狭い畑に、はだか麦、大豆などの豆類、サツマイモを植え、山では猟を行い、現金収入は桑の木を育てた養蚕と林業で暮らしていたといいます。

畑は花崗岩の石ころを取り除き、落ち葉や薪ストーブで出た灰を真砂土に混ぜ合わせた土に、ジャガイモ、菊芋、里芋等を植え付けました。現実は私が考えていたような生育にはならず、収穫するという結果ではありませんでした。

それから何年後なのかは覚えていませんが、畑にミミズが現れるようになってからは小さなジャガイモ、里芋等を収穫できるようになりました。その時の嬉しさは忘れられません。油断していた年には、収穫したジャガイモが一個も残さずイノシシに食べられました。今では、収穫直後にお裾分けをできるようになりました。スタッフ達の喜んでいる顔をみると、作ってよかったなあーと思っています。

私の体験は、自然と向き合って暮らしてきた松木の村びとからすれば暮らしの一片かも知れませんが、私たちの文化の源は、森から授かってきたのではないかと思っています。森は生活の知恵を授ける母であることを実感しています。

真砂土が多い「みちくさ畑」に水が潤うようになるのは、畑の上部に苗木を植えて育てている森の働きかも知れないと思っています。世界中で発生している熱波、干ばつによる食糧危機を見聞きしていると、森の働きを衰弱させてはならないと思います。

森づくりと小さな畑で学んだことは、何事も人間(自分)だけの都合だけでは生きていけないということです。壊してはいけないことは、仲間や家族の絆、自然環境そして人間や草木への心遣いだと思っています。一生懸命になって、その対象に働きかけると確実に応えてくれるというのが仲間であり、草木ではないかと思えるようになりました。

人は嘘を言い、裏切りも行いますが、畑や森は絶対に裏切らないということを教わりました。自覚しようがしまいが、森がなければ人間は生きていけないことも実感しています。若葉が運ぶ草木の香り、心地よいカジカガエルの鳴き声が聴こえる足尾・松木渓谷は私の心のふるさとです。下界の雑踏を遮断し、松木村びとの暮らしに思いを馳せる瞬間は私の気持ちをほっこらさせてくれます。大好きな場所です。

群馬県　松村宗雄

## 森は友だち

今年は 6 月 6 日に関東甲信地方が梅雨入りし、6 月 28 日には過去最も早い梅雨明けをしました。また、東京では 6 月 25 日から 7 月に入っても 35℃以上の猛暑日を観測するなど危険な暑さを記録し、全国的にも 6 月として観測史上最高の気温を更新しました。電力需給ひっ迫注意報も出され、節電への協力を求められています。会員の皆さま、決して無理はせずにエアコンや扇風機など必要な電気は使用しましょう。

涼を求めて、森に入ってみようと神奈川県横浜市南部の栄区に位置する横浜自然観察の森に行きました。ここには、4 つの道（トレイル）があり、私は雑木林の尾根を歩くコナラの道を歩きました。約 1.7km の道をゆっくり 1 時間林の中を歩くと、コナラやヤマザクラなどの落葉樹、タブノキ、アカガシ、スダジイなどの常緑樹、スギやヒノキの針葉樹などからなる様々な林が見られました。

故 C・W・ニコルさんは「森は天然のクーラー」と呼んでいたそうですが、木陰に入ると 5℃位涼しく感じ、暑さを忘れさせてくれます。その日も気温は 35℃を超えていましたので、森に入る前は体力も気力も弱っていましたが、土や葉っぱに触れ、鳥の囀りを聴き、身体で自然を感じたことで力が湧いてきたのは何とも不思議です。気持ちも安らぎ、人間の心や身体を癒す森の持つパワーを受けて、人間は森に生かされていることを再認識することができました。コロナ禍、危険な暑さの中だからこそ、自然の恩恵を五感で感じて心も身体もリフレッシュをしてみてはいかがでしょうか。運営委員　小林敬

## 編集後記

「まだ植えるの～」と小さい声が聞こえました。南相馬市民鎮魂復興植樹祭。小学校に入ったか入らないかというお子さんで、ちょっと疲れたのかな。お母さんが何と答えたかは聞こえなかったのですが、その後も一生懸命植えている姿は確認できました。やっぱり大人は重要ですね。

「明日っから雨なんだから、水なんてやらなくたっていっぺや」と言いつつ一生懸命水桶に苗を浸していたお父さん。正直僕もそう、思いました。

やんちゃそうなお兄さん、基本言うことは聞かないのだけれど、人とズレながらも植えることに集中してたり。

地元でも植樹やってるけど南相馬が好きなんです、という仙台から来た方。地元じゃないけど嬉しいな。

僕は縄の縛り方が違うと注意され。。。おかしいなさっき注意されたのと逆にやったはずなんだけど。そもそも縛り方って重要？とか。でも植えるってやっぱりいいなぁ。

そんなこんながありまして、3 年ぶりの南相馬の植樹祭はとても楽しく参加することができました。こうしていろんな人が参加することが、何をしてもきっと鎮魂につながっているんだろうなぁと、そんなことをふと思った素敵な植樹祭でした。「木を植える人たちがいる大丈夫」（運営委員　小黒伸也）

森の木魂（こだま）第 7 号（2022 年 7 月 24 日発行）
発行：森びとプロジェクト
発行人：桜井勝延
編集人：森びとプロジェクト編集委員
第一版

〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室
TEL&FAX 03-6417-3750
http://www.moribito.info/
Email info@moribito.info